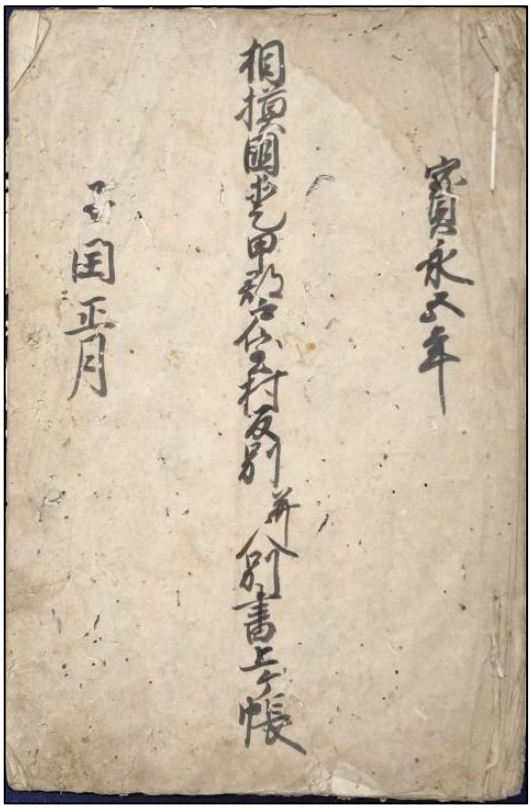
あつぎ郷土博物館NEWS 11月号

好評開催中

企画展「記録されたあつぎの災害」展③
さまざまに連鎖して長引く災害



▲「相模國愛甲郡戸室村反別幷人別書上ヶ帳」（宝永５年(1708)閏正月・「霜島家文書」）

現在、あつぎ郷土博物館では、企画展「記録されたあつぎの災害―地震・神鳴り・禍事（かじ）・やまひ―」を開催しています。会期は11月30日(日)までです。お早めにご来館ください。

大きな災害は、時に別の災害を引き起こし、被害を拡大、あるいは長引かせることがあります。被害が拡大した事例の一つが大正12年(1923)９月１日に起きた関東大震災です。東京や横浜と同じく厚木町でも強い揺れの直後に起きた火災によって町の八割が焼き尽くされています。

宝永４年11月23日(1707年12月16日)に始まり、約２週間に渡り噴火を続けた富士山の宝永噴火は、宝永の「砂降（すなふ）り」と呼ばれています。噴火そのものによる人的な被害は少なかったものの、「砂」と呼ばれた火山灰が関東各地に降り積もり、長く被害をもたらしました。厚木市域内では温水（ぬるみず）村で平均７寸(約21㎝)、戸室（とむろ）村で平均６寸(約18㎝)の火山灰が降り積もりました。この「砂」は田畑深くに埋めたり、「砂置場（すなおきば）」へ運んだりして除去されましたが、砂置場となった地は、60年近くを経てもなお生産力を持たない「潰地（つぶれち）」として残りました。さらに雨が降る度、河川に流れ込み、小鮎川に平均４尺(約121㎝)、恩曽川に平均３尺５寸(約106㎝)の「砂」が溜まり、川底が浅くなった河川は、長年に渡り洪水被害や土砂災害を引き起こしました。宝永の「砂降り」は、降灰被害のみに留まらず、洪水や土砂災害を誘発、長年に渡り人々を苦しめ続けた自然災害でした。

展示最終日の11月30日には、宝永噴火と県央地域をテーマにした講演会を開催します。お早目の申し込みをお願いします。

●**会　期**：11月30日（日）まで
●**入館料**：無　料
●**講演会、関連行事参加費**：無料

あつぎ郷土博物館　１１月の予定

日	曜日	行　事　内　容	講師等	時　間
企画展「記録されたあつぎの災害」11月30日まで開催				
13	木	あつぎの古文書解読会　＜参加自由＞	古文書解読会会員	13:00～16:00
20	木	あつぎの古文書解読会　＜参加自由＞	古文書解読会会員	13:00～16:00
25	火	休　館　日		
27	木	あつぎの古文書解読会　＜参加自由＞	古文書解読会会員	13:00～16:00
29	土	企画展示ギャラリー・トーク③	当館学芸員	13:30～14:00
30	日	企画展講座宝永噴火と県央地域＜参加申込制＞	馬場弘臣氏（元東海大学教授）	13:30～15:30

展示案内

毛利氏を知る

１月24日(土)から３月１日（日）まで、市制70周年記念展示「寿 ―毛利家と共に―」を開催いたします。展示する、ほとんどの資料は毛利博物館所蔵の優品をお借りする予定です。

毛利博物館は、明治時代に毛利家が建てた旧毛利邸（写真）の一部を博物館施設としたものです。毛利邸本邸は、当時の内務大臣・井上馨が場所を選定、江戸期の寝殿造様式を取り入れた近代建築で、屋久島の神代杉など良質の部材で建築されています。大正天皇、昭和天皇など皇族方が宿泊されたこともあります。庭園も国指定名勝に指定されており、広いお庭にはひょうたん池、東屋、石橋などが設置され、大変壮大かつ優美な場所です。来年２月、そんな毛利博物館とあつぎ郷土博物館の間を、インターネットで繋ぎ、毛利博物館の学芸員に展示解説などをしていただくとともに、風景等を楽しんでいただける様にいたします。旧毛利邸の雰囲気もお楽しみください。

●あつぎ郷土博物館　**開館時間**　午前9時から午後5時まで（入館は午後4時30分まで）
休 館 日　毎月最終月曜日　年末年始（12/29～1/3）

●古民家岸邸　**開館時間**　午前10時から午後3時まで（入館は午後2時30分まで）
休 館 日　月曜日と火曜日（祝日の場合は翌平日）　12/25～1/3

（申込み・問合せ）あつぎ郷土博物館
〒243-0206　厚木市下川入１３６６－４　電話 046－225－2515
Mail 8650-3@city.atsugi.kanagawa.jp　FAX 046－246－3005